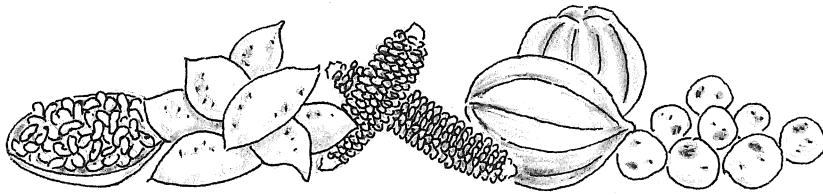


層は30代と50～60代が多かった。

調査票のレイアウトの都合で、ジャガイモとサツマイモについての「ご意見欄」は、サツマイモの質問ページの最後にしか設定できなかったこともあって、内容の多くがサツマイモに関するものであった。その内容の大半

(約43%)は、「おいしい」、「大好きです」、「よく食べる」と言った讃辞で、ほかに「好きな食べ方」や「健康によい」などの意見があった。意見・要望的な内容としては、「レシピがあればよいのだが」、「新しい品種を買える店がない」などがあった(表A-4)。



ジャガイモと映画『飢餓海峡』

北海道で生産されるジャガイモの多くはでん粉(片栗粉)になっているが、それが出てくる映画になかなかめぐり会えない。ようやく見たのがこれ、しかしでん粉工場は舞鶴にあるとの設定の話。水上勉の同名小説を内田吐夢が監督した推理劇。1965年制作。

網走刑務所を仮出所した2人と元仲間の三国連太郎演ずる犬飼多吉が小樽に近い町で質屋の主人を殺して金を奪い放火して函館へと逃亡する。

犬飼がお金をひとり占めするため、「男爵資料館」に近い七重浜で2人を殺し、台風で転覆した青函連絡船層雲丸遭難現場に放置し、自分は小舟で下北半島へと逃亡する。そこで情けをかけてやった女杉戸八重(左幸子)が男の爪を大切に持っていたから、後日又殺

人を犯さざるを得なくなる。

大男は「芋俵なら2俵を軽々担ぐ」人で、俱知安近くの鉱山跡地に馬鈴薯つくりを奨励し、それを300tの運送船「北海丸」で舞鶴に運び、そこに建てた工場のでん粉をとり、このでん粉と魚肉でハンペン、チクワを製造して大成功。偽名の樽見京一郎は名士になり、刑余者更正事業資金に多額の寄付をし、市の教育委員にもなっていた。

ある日、昔酌婦の八重は舞鶴で心中と思わせる死体となって発見された。女の懷中からでん粉工場主樽見京一郎が、刑余更生事業資金に三千万寄贈したという新聞の切り抜きが出て旧悪が露見することになる。

(いも類研究会顧問・浅間和夫)